

「群馬県第一回巡講日誌」註解

出野尚紀

ideno naoki

一 はじめに

井上円了が大正六年に二度行った群馬県巡講の記録は、それぞれの回ごとの二冊にまとめられている。その内、九月二十六日から十月三十一日にかけての分は、「群馬県第一回巡講日誌」という題目で『南船北馬集第一四集』に掲載されている。『井上円了選集第一五巻』（一九九八年、東洋大学発行）をもとに、巡講日誌に記載されている人物や訪問地の記述にたいして、巡講地の市町村史や人物誌、訪問地の聞き取り調査をもとに註解を付すとともに、明白な誤植を直すものである。

そもそもこのようなことを行おうと考えたのは、「群馬県第二回巡講日誌」に、中之条町の浄土宗清見寺について、「与津清見寺」と記されており、円了が訪れたことがある南側が開いている土地に建つ清見寺といえ、清見湯に面する興津清見寺にちがいないだろうということにある。そのほかにも精読すると誤植と思われるところが散見されたので、註解を付して、百年後の現代的に理解を深められるようにしたいと考えたものである。

講演場所の学校は、継続している場合は現校名で、廃校になっている場合は廃校時の校名とした。宿泊場所を含め、寺院は移動していないが、それら以外の民間施設は、場所が分らないところが多いので、場所が判明す

るときは、場所を記している。そのままでは長いので、十日ずつに区切った。

二 出発

九月二十六日曇り。午前八時に、当時の浅草駅、現在のとうきょうスカイツリー駅を伊勢崎行きの汽車で出発した。随行の角田松寿は、大正八年の『東洋大学一覽』の「出身者一覽」に、新潟県出身、巢鴨在住として名前がある⁽¹⁾。また、著書として、昭和八年に興風書院から出版した『実験靈能難病黒焼療法』がある。円了は十時半に太田駅に着いているが、現在は特急で浅草駅から九十分弱であるが、特急を使わない場合、二時間以上かかる。

三 九月下旬

九月二十六日午後、太田高校で講演をした。校長の角田伝は群馬県出身で、後に跡見女学校で数学と理科を担当している⁽²⁾。太田の呑竜様とは、浄土宗義重山大光院のことで、呑竜は初代住職の名であり、その日は縁日が立っていた。宿泊した芭蕉屋はこの後も泊まっているが、詳細は不明である。郡内の巡講は教育会の主催で、各町村で開会し、毎日午前と午後の二回講演をした。羽鳥升平郡視学と木村邦十郎郡書記が各講演場所に同行して、案内の労をとることとなっていた。新田郡長は天笠久真三⁽³⁾だった。

二十七日雨のち晴れ。朝に、街の北側の山裾にある大光院に参詣した。「新田家の祖、義重を開基」とあるが、徳川家康が新田氏の裔を名乗ったことにより、一六一三年に開かれた寺である。ついで、山麓を北に移動し、義貞院金竜寺境内にある新田義貞墓所をたずねた。山上には義貞公の霊を祭る新田神社がある。その山は金山とい

い、戦国時代の城跡で、金山城跡として整備されているが、円了は神社までは行っていない書きぶりである。

金竜寺を出でて市街の方に向かうと、高山彦九郎を祭る高山神社があり参拝した。円了が参拝した拝殿は現在の社務所にあつたもので、現在の拝殿とは異なる。そして、太田小学校にそのまま移動して講演をした。開会は町教育会の主催で、武川六太郎町長、堀越松次郎小学校長が発起人だった。午後に、人力車で九合村に移動し、九合小学校で講演した。二校間の距離が半里余とあるが、直線距離で二キロメートルである(4)。倉沢平次郎村長、島山角太郎小学校長が発起人だった。夕方、芭蕉屋に戻り、宿泊した。

二十八日晴れ、夜は雨。人力車で沢野村に移動し、午前は太田小学校から三・八キロメートル離れた、沢野村の沢野小学校で講演した。神谷健三郎村長、富岡達四郎小学校長が発起人だった。午後は、尾島町に移動して講演した。発起人は十代町長の金井貢町長と塚越輝平小学校長、橋本武八助役など二十九名である。講演場所が記されていないが、太田市亀岡町にある尾島小学校である。沢野小学校からは三・五キロメートル離れている。金井町長が代議士⁵だったときに面識を得ている。製糸業が盛んで、製糸機の音が談話を遮るほどだった。宿所は芳沢旅館だが、場所是不明である。

二十九日雨。午前は、人力車で尾島小学校から三・九キロメートル離れた世良田村の世良田小学校で講演した。村役場、小学校、青年会の主催で、栗原大三郎村長⁶、渋沢嘉津間小学校長が発起人だった。生徒千人、幅七間、長さ十五間の講堂を有し、会場の壮大なること郡内第一だった。村内の字徳川は徳川家の発祥地であるとして、その旧址に世良田東照宮がある。午後は、人力車で四・二キロメートル離れた、木崎町の木崎小学校に移って講演した。中島永一郎町長⁷、小川亀三郎小学校長が発起人だった。「当夕、尾島町に帰宿す」とあるので、宿舎は同じく芳沢旅館である。なお、尾島小学校までの距離は二・八キロメートルであり、木崎と尾島を結ぶ道がある。

三十日雨。午前は、人力車で宝泉村に移動し、尾島小学校から三・七キロメートル離れた宝泉小学校で講演した。渡辺梅五郎村長、栗原資三郎小学校長が發起人だった。午後は、更に人力車で三・七キロメートル移動し、鳥之郷村の鳥之郷小学校で講演した。發起人は武内織次郎村長、斎藤熊雄小学校長だった。この夜は姫子鉱泉の旅館大島屋に泊まった。姫子鉱泉自体の場所が不明だが、太田市大島町が東武桐生線の太田駅と三枚橋駅の間にある。翌日午前の会場と鳥之郷小学校の間が二・五キロメートルなので、会場から離れる、丘陵ではない方向に移動したと思われる。「夜半後、雨が激しくなり暴風が加わり、建物が揺れ、安眠することができなかった」と記すが、これは台風が襲来したためで、行徳や深川は、大潮の満潮と台風が重なったため、高潮となった。円了は、これを「つなみ襲来、悲惨を極む。当夕、中秋十五夜なるにこの惨事あり」と記しているが、満月ゆえに、満潮時の水位が高まったのである。

四 十月上旬

十月一日晴れ。台風一過の良い天気だった。朝、旅館を出ると、田んぼも道も雨水が溜まっていた。人力車で強戸村に入ったが、道は舗装されていないため、ぬかるみがひどく人力車がようやく通れるほどだった。会場は強戸小学校で、發起人は増田才次郎村長、森下正作小学校長などだった。午後は、生品村の生品小学校に移って講演した。まだ、道はぬかるんだままだった。距離は三キロメートル離れている。須永富次郎村長⁽⁸⁾と茂木新助が發起人だった。講演後、更に南に一・七キロメートル行つて、新田義貞館跡と伝わる反町町の薬師に宿した。寺号は照明寺で真言宗である。毎年、旧正月四日は薬師の縁日で⁽⁹⁾、老弱男女群集し、堂の内外充溢するという。その夜は旧八月十六日で、明月が高くかかり、大気は澄み渡り、境内の庭が広く、月見に適していたので、漢詩

を一首作った。

二日晴れ。午前は、人力車で三・一キロメートル離れた綿打村の綿打小学校で講演をした。発起人は正田盛作村長¹⁰と青木嘉之小学校長だった。午後は、人力車で藪塚本町に移動した。途中の道は二キロメートル弱、桜並木が続いていた¹¹。六キロメートル離れた藪塚本町小学校で行った。発起人は町田啓次郎町長と佐野間竜童小学校長だった。講演が終わったら、人力車で二・二キロメートル行き、山麓にある温泉場に至り、今井館¹²に泊まった。東武桐生線藪塚駅からの道のりが、一キロメートルほどである。書家の日下部鳴鶴は、ここに余霞楼と題字記している。旅館主の今井伊三郎は、俗気を脱して風流思想を持っていて、哲学堂に寄付をしてくれた。今井館の隣に伏島館¹³がある。更に丘を隔てて長岡鉱泉¹⁴がある。道のりは二キロメートル弱、長生館という旅館があるという。

三日晴れ。人力車で約六キロメートル行った、太田市からみどり市に入り、笠懸村の西因舎第一分校¹⁵で、午前の講演をし、更に東因舎第二分校¹⁶に移り、午後の講演をした。発起人は赤石益太郎村長、岩崎喜四郎第一分校長¹⁷、津久井藤一郎第二分校長¹⁸だった。両校の間は、約二キロ離れている。本日で新田郡が終わるので、天笠郡長の来訪があった。宿所は赤石村長の自宅だった。羽鳥視学、木村書記はずっと同行してくれた。四日曇と晴。赤石村長宅から、七百メートルほどの岩宿駅より鉄道に乗り、前橋駅で下車し、これより四・二キロメートルの間、利根川の橋¹⁹を渡り、桑畑の間を人力車で通過して群馬郡総社町に至った。養蚕業が盛んである。宿泊所は天台宗の名刹光厳寺で、館林藩主秋元家の菩提寺だった。会場は門前の総社小学校で、主催は仏教協和会、発起人は神谷周吉町長、丹下愛作小学校長、協和会の大滝卓雄、光厳寺住職で協和会の宮本順良だった。この日、高橋朝治群馬郡視学の来訪があった。

五日雨。人力車行で七・九キロメートル、桑園稲田の間を通って塚沢村の塚沢小学校で、午前の講演をした。主催は群馬郡学事会、発起人は反町重治郎²⁰ほか十二名だった。午後、一・四キロ人力車に乗り、高崎市に入った本町三丁目停留所から路面電車に乗って、金古町の金古小学校で講演した。主催は学事会で、発起人は岩井武治校長、高橋良作町長、国府、清里、堤ヶ岡三校長らで、宿所は曹洞宗常仙寺である。ここは昔、越後街道の宿場だったので、旅客に宿泊するものが多かったが、当時は全く農村となっていた。

六日雨。金古から電車で渋川町に行った。渋川と高崎の間は二〇・九キロメートル²¹、金古はその中ほどにある。渋川で一時間半、馬車鉄道の発車を待ち、十時に渋川を発って、十二時に利根郡沼田町に着いた。その間の行程は約二〇キロメートル、近々馬鉄を電気鉄道に変換するという²²。本日の行程は総計三〇キロメートルである。沼田の市街は丘陵の上にあつて井戸水に乏しく、飲用水には不便さを感じるが、眺望はよい。昼食を利根郡役所でしたが、そこは崖頭にあつて、室内より利根川を見渡せ、対岸の丘山起伏を借景にしているようだった。午後の講演会場の沼田小学校は大校舎と大講堂がある。生徒一千四百人で、大講堂は、幅八間、長さ十八間である。聴衆が五百人以上いたが、講堂の面積の三分の一を満たさなかった。発起人は森川松太郎町長²³と、平野書記、宮下、三井、根岸四氏だった。休憩所は町役場だった。宿所だった杉丸旅館の掲示を見ると、宿泊料が一等二円、二等一円二十銭、三等八十五銭とあった。また、聞くところによると、按摩十五銭、斬髪十四銭、湯賃三銭、大工一日八十銭、人力一里四、五十銭、馬鉄渋川まで一人につき四十五銭という。よって当地の物価が分かった。

七日晴雨不定。馬車で八・六キロメートル離れた白沢村字高平に行った。道ばたは桑園ではないところはない。会場と宿は曹洞宗雲谷寺である。星野全竜住職は哲学館に通っていた。曹洞宗の布教師となっている。

藤井閑蔵村長、増田金作県会議員、森島順之助白沢小学校長、岡村為蔵助役、小野要吉書記、山口磯一軍人会長などが発起人だった。

八日雨。雲谷寺山を越えて真っ直ぐ行くと約六キロメートルの道のりだが、徒歩のみなので馬車で一四キロメートルの迂回をした。泥が深くて馬が進まず三時間を費やしてようやく川場村の川場小学校²³に着き、午後講演をした。発起人は宮田曾六村長、桑原仲蔵助役、桑原亀三郎収入役、井上好人村会議員だった。役場の二階に待賓室があり、ここに宿泊した。小使は髷を結っていた。利根郡にては各村平均一人の結髪者がいると聞いた。役場から二キロメートルほどで川場温泉になる。利根郡の景色で漢詩を一首詠んだ。

九日晴れ。早朝から馬車に乗って、再び白沢村に入り、雲谷寺のある高平で馬の背に移った。ここから坂を幾つも越えて片品川に沿い進み、東村に出た。坂道の表面に敷かれた石がでこぼこで、また泥が深く、馬が遅々として進まなかった。まもなく、新道が開通すると聞いた。会場は東村字追貝の旧沼田市立利根東小学校²⁴である。川場からの行程が約二四キロメートルで、午後一時に着いた。発起人は星野雅一郎村長、小尾常菊小学校長、金子長次郎書記である。東村から片品村を経て、日光湯本温泉に出ずる金精峠越えの山道があり、一日で湯本温泉に達する。いわゆる小川越えと言われているものである。そして日光の門前町までの道のりは六〇キロメートルと言われる²⁵。また、本村には山水の奇勝があり、一つ目は千歳橋で、その形が甲州の猿橋に似ていて、それに匹敵する。そして、障子岩、飛鱗の滝、吹割の滝などがある。それらの光景は到底筆で表現することはできない。しかし、これらを見物して七言絶句の一首を賦した。昨日まで雨だったので、水勢が強く一層雄壮だった。山林の一、二割が紅葉を帯びていた。東村の小学校の通学区域が十五キロメートル以上に渡るので、小学校に寄宿舍の設備があり、分校も六カ所にある。隣村の片品村は七つの分校があるという。夜は、追貝の柏屋旅館に泊

まった。この方面はすべて生方宗三郎郡書記が案内してくれた。

十日晴れ。馬に乗って再び幾つも坂を越え、高平から馬車に移って、沼田に帰り、午後沼田高校(27)で校友会のために講演をした。中学校長は河口清之だった。この夜は再び杉丸館に宿泊した。客室の設備が完璧で、室内に卓上電話があり呼び出しができた。野中富三郎郡長の来訪があった。

五 十月中旬

十月十一日晴れ。鈴木銀藏郡視学と馬車で道のり二〇キロメートル移動し、水上村字湯原に入った。途中、近來の被害のため、橋が落ち、道が崩れて、馬車で進めないとところが一、二カ所あった。午後に水上小学校で講演をした。聴衆の中には一五キロメートル以上離れた山の中から来たという人もいたという。發起人は鈴木周太郎村長、梶原三小学校長などである。字湯原甲の米屋旅館は円了が四十年前、清水峠の山道を越えて越後の郷里に往復した際、宿泊したところでもある。宿料は特別上等一円、一等八十錢、二等七十錢、三等六十錢とあって、非常に安い。食膳にイナゴの佃煮を加えている。山形は茶菓子の代わりにイナゴを出す、食事に用いないので、山形県以上のことである。米屋には内湯がない。内湯があるのは藤屋と古屋(28)である。米屋の宿泊客は中等以下の客が多く、旅館設備もそれ相応である。県道より温泉場に入る所に一本の橋があつて、両岸の岩が屹立している様は、東村の千歳橋の風景に似ている。ここから利根川の源流を遡ること一五キロメートルのところに、藤原という集落がある。ここは「利根郡の樺太」と呼べるところで、樺太に行ったときのことを懐かしんで一首詠んだ。

十二日晴れ、ただし風がある。早朝、馬車で湯原を発ち、前日の道を繰り返して後閑に至って、橋を渡り桃野

村字月夜野に入った。途中、山林に紅葉が点々としているのは晩秋に入っているようだった。会場は劇場桃栄館で、発起人は後閑源助村長⁽²⁹⁾、高橋徳太郎助役、櫛淵啓三郎古馬牧野村助役⁽³⁰⁾、増田誠三収入役⁽³¹⁾などである。当夕は後閑村長の家に泊まった。造酒業を営んでいる。東洋大学出身者である沼田町の佐藤海豊、古馬牧野村の青木道純、薄根村の宮沢竜海⁽³²⁾が慰問に来た。村内には沼田藩主が真田家だった時代の義民茂左衛門を祀る茂左衛門稲荷がある。

十三日晴れ、夕方から少雨。馬車に乗って新治村に入った。途中に塩原多助の墓⁽³³⁾を見る。従来から一角を碎きて石片を取り去って持っていると、相場に当たるとか、または金持ちになるとかの迷信があるという。また、この辺りは山栗の産地で、山のように栗を積んでいる家がある。会場は村役場だったみなかみ町新治支所⁽³⁴⁾で、発起人は木桧仙太郎村長、沢口蔦五郎助役、清水竹次郎収入役などである。講演後、更に赤谷川を遡ること一・九キロメートルの湯宿温泉に移り、若山牧水も泊った金田屋に宿泊した。ほかに湯本旅館があり、ともに内湯がある。ここから更に遡ると法師温泉がある⁽³⁵⁾。三国峠の下、谷間に湯宿があり、長寿館と武蔵館という⁽³⁶⁾。三十五年前に帰郷の際に入浴したことがある。食後、一吟を試みた。

十四日晴れ。早朝湯宿から馬車で道のり一六キロメートルの沼田に行った。更に馬鉄に乗って、群馬郡渋川町に行つて、午後に講演をした。この日の道のりは三六キロメートルあった。会場の渋川北小学校は校舎が大きく、しかも丘上にあつて遠くまで見渡せた。学校前に天台宗真光寺⁽³⁷⁾の大伽藍を見る。この寺は円了が二十余年余りに講演した会場である⁽³⁸⁾。渋川町は四通八達の要路で、年々戸口増加していると聞いた。主催は学学会で、発起人は中川又七郎学事会長、埴田好藏副会長、幹事、理事の八人で、宿所は山田屋旅館である。

十五日曇晴。渋川から金古までの道のり十キロメートルの間電車に乗り、金古から箕輪村までの道のり四キロ

メートルは人力車で移動した。この間、桑園が連なっているが、道はぬかるみ、泥が深く、乗客と車夫がともに苦しんだ。昼間は箕輪小学校、夜間は宿所の曹洞宗松山寺で講演した。主催は仏教協和会で、五十嵐禪海松山寺住職、哲学館に通っていた永井黙淵金竜寺住職が開催に尽力し、石川又三郎村長、近藤守多小学校長も助けてくれた。ここは昔箕輪城があった跡で、街路は今も当時の町の形となっている。

十六日雨。近道だと六キロメートルのところを人力車は迂回して、道のり一二キロメートルで室田町に至った。市街は烏川に沿う。この対岸の里見村で講演したことがある⁽³⁹⁾。会場は下室田小学校で、主催は学事会、発起人は田中嘉十郎下室田小学校長⁽⁴⁰⁾、修養会清水房吉、その他、戸塚某隣村校長、滋野某、鐸木真平榛名山小学校長⁽⁴¹⁾、福田馬太郎上室田小学校長⁽⁴²⁾、清水武衛中室田小学校長⁽⁴³⁾、鈴木某が尽力してくれた。高橋郡視学は昨日も今日も出席した。榛名神社は本町内だが、下室田の市街地から道のりで一二・七キロメートルほど離れているという。宿所は中沢屋旅館だった。烏川を流れる水の音が建物内に響いていた。

十七日雨。人力車で十三キロメートル離れた、高崎市の劇場高盛座で⁽⁴⁴⁾、午後に講演をした。これは市教育会の主催で、内田信保会長⁽⁴⁵⁾、平井八太郎副会長、幹事の小林茂高崎中央小学校長⁽⁴⁶⁾、浅井継世高崎北小学校長⁽⁴⁷⁾、土屋性一郎高崎南小学校長⁽⁴⁸⁾、上原喜曾八高崎東小学校長⁽⁴⁹⁾、角田武雄高崎市学務主任⁽⁵⁰⁾が発起人だった。当夜、宿所曹洞宗赤坂山長松寺で修養会のために講演をした。山端息耕住職⁽⁵¹⁾は宗教にも教育にも熱心で、すでに子守学校⁽⁵²⁾を設け、また修養会の運営をしている。群馬郡役所は高崎市内にあり、郡長は橋本直次郎である。

十八日晴雨定まらず。午前は高崎女子高校⁽⁵³⁾で講演をした。校長は佐藤穂三郎⁽⁵⁴⁾である。そこから滝川村に向かったが、道が狭く泥が深く、人力車が覆りそうになることが数回あった。次の会場まで六キロメートル離れている。会場兼宿所の慈眼寺は真言宗高野派の中本山で、門と諸堂が立派である。桜の木が名高く、俗に花見

寺と呼ばれている。山号を華敷山⁽⁵⁵⁾という。その名のごとく、境内に数十株のシダレザクラがある。壁に元知事揖取素彦の観桜の詩幅を掲げていた。これを一読していると即興の一首が浮かんだ。当地の開会は三カ村連合の主催にして、天田俊藏滝川村長、松本長松京ヶ島村長、信沢兼吉大類村長が發起人だった。慈眼寺の住職西川良清もまた大いに尽力してくれた。

十九日晴れまた雨。人力車で道のり四キロメートルほどの倉賀野駅に行き、鉄道に乗って、高崎、前橋を経由し、勢多郡木瀬村の駒形駅で降車し、駅前の旅店で休憩した。この日、午前中に駒形小学校で招魂祭をおこなっていた。午後に駒形座で講演をした。この劇場は村落には不似合いの大きさで、千三、四百人が入れるといわれた。主催は青年会で、發起人は清水忠次郎村長兼青年会長、下山章吾幹事などだった。東京帝大教授の美学者大塚保治の出生地である。この日は、江川屋旅店に泊まった。旅館は小さく、客があふれるほどいた。ここは赤城山下の正面に位置するので、カラ風の本場であるといわれる。

二十日曇り。汽車で前橋市に移り、午前は師範学校⁽⁵⁶⁾で講演をした。校長は樋泉慶次郎である。ついで、前橋高校⁽⁵⁷⁾で講演をした。成富信敬中学校長⁽⁵⁸⁾は旧友である。午後は、前橋市大手町の臨江閣で開催された市教育会で講演した。高橋源之助会長、岡田養平副会長、伊東保乃磨小学校長、樋口千代松図書館長らが發起人だった。帰路、中川友次郎知事の官舎を訪問した。県内務部長は窪谷逸郎、学務課長は坂本森一である。夜は、住吉屋⁽⁵⁹⁾に泊まった。ここは高等旅館で、宿泊料が高く、優等三円以上、一等二円五十銭、三等一元五十銭、四等一元と表示されていた。円了は風邪のため発声に大いに苦しんだ。

六 十月下旬

十月二十一日快晴⁽⁶⁰⁾。ずっと晴雨定まらなかったが、今日はじめてこの快晴を見る。ただし終日風があった。午前は勢多郡役所議事堂⁽⁶¹⁾で、郡教育会のために講演をした。発起人は横尾雄弥郡長、鈴木又吉郎教育会長、永井喜八副会長、狩野虎千代郡視学などだった。前橋名物は片原鰻頭だというのを聞いて賞味した。夜は、同じく住吉屋に泊まった。

二十二日快晴、朝の空気に寒さを感じた。早朝に人力車で住吉屋を発ち、勢多郡大胡町を経て粕川村に行った。会場までの道のりは約十五キロメートルである。日中、蠅がとても多い。蠅は赤城の名物であるといわれた。途中で一首吟じた。会場は粕川小学校で、主催は四カ村青年会連合、発起人は金田陸三郎大胡町長、小池一郎宮城村長、阿久沢忠三粕川村長、岩崎莊作新里村長、各小学校長などである。夜は瀬下長次郎宅に泊まった⁽⁶²⁾。

二十三日曇晴。人力車で前橋に戻り、約四キロメートル電車に乗って、南橋村の桃川小学校に行つて講演した。発起人は加々美助次郎村長⁽⁶³⁾、鈴木又吉郎細井小学校校長⁽⁶⁴⁾、木村善十郎桃川小学校校長⁽⁶⁵⁾などである。そして休憩所は真言宗日輪寺だった。講演後、四キロメートル強、電車に乗り、北橋村の曹洞宗桂昌寺⁽⁶⁶⁾に行つて宿泊した。明峰玄海住職⁽⁶⁷⁾は明治三十三年哲学館卒業である。寺は利根川の坂東橋たもとの丘の上に建ち、山河の眺望が大いに良い。終夜、利根川の川瀬の音が、枕頭まで入った。その声の方向によって、天気の時雨を知ることができる⁽⁶⁸⁾と聞いた。この村は赤城山、榛名山の中間にあつて、赤城おろしも榛名おろしも受けず、その代わりに越後おろしを受けるといわれた。

二十四日曇り。朝、桂昌寺を辞し、馬に乗ること一・九キロメートルの橘小学校に行つて、午前の講演をした。今井徳太郎村長⁽⁶⁸⁾、角田武三郎小学校校長⁽⁶⁹⁾、明峰桂昌寺住職が発起人だった。午後、更に馬の背にまたがり、地

勢高くなったり低くなったりする間を行くこと四キロメートル弱で、横野村の天台宗興禪寺に着いた。この寺で講演と宿泊をした。発起人は木暮松三郎村長、角田茂八郎助役、永井喜八小学校長、角田円造小学校長⁷⁰である。この地方は赤城山斜面に位置し、地形は凹凸がないようだが、川があるたびに削られていて、カボチャの皮のようにでこぼこであるといわれる。

二十五日雨。朝、興禪寺を発ち、馬で吊り橋である大正橋を渡り、渋川に出た。寺から停留所までの道のりは、約三・五キロメートル。渋川から電車、前橋から汽車に乗って岩宿駅に着き、そこから人力車で四・六キロメートル離れた山田郡大間々町に行った。街は足尾街道に沿っていて、赤城山の登り口でもある。赤城の山麓にあるが赤城を望むことができない。夜になって大雨となる。寄席共楽館で青年会のために講演をした⁷¹。声が大雨に遮られた。ただ大雨でも、聴衆がよく集まった。発起人は須永虎吉青年会長⁷²、副会長の小野太一、近藤春吉⁷³、理事の金子寅亮、新井宇四郎などである。中島幸平郡視学⁷⁴も出張して来た。旅館豊田屋⁷⁵に宿して蚊の声を聞いた。暖かすぎるのだろう。

二十六日晴れ。午前に、人力車で三キロメートル離れた、川内村の川内小学校に行つて、青年会のために講演をした。途中の道路は泥や石が多かったが、山林は紅葉が交つて綺麗だった。中島栄一郎村長、役場吏員、学校職員、青年会員二十名が発起人だった。午後、人力車で大間々に帰り、学事会のために大間々小学校⁷⁶で講演した。五十嵐謙三校長などが発起人だった。その夜、豊田旅館で、青年会幹事のために特に一席の座談を行った。

二十七日晴。朝、大間々駅から汽車で桐生町に行き、桐生女子高校⁷⁷で講演をした。井部貞吉校長は哲学館明治三十六年得業である。吉田恒喜郡長が来たので会うことができた。午後は、人力車で道のり約四キロメートルの境野村に行った。機工を本業とし、家々から響く織機の音が連なっている。小学校で青年会による講演をした。

教育家の桜井明、宮永英一などが発起人だった。夜は桐生町にもどり、金木屋⁽⁷⁸⁾に宿泊した。当夜は市が開かれる日の前夜ということで、旅館は満員で、深更になっても醉歌の声を聞いた。

二十八日雨。午前と夜分の二回、東洋織布会社⁽⁷⁹⁾で、工女のために講演をした。工女は住込みと通勤を合せて約千人ということである。その間、午後には桐生小学校⁽⁸⁰⁾で講演をした。郡教育会の主催で、吉田郡長、中島視学と各小学校の校長である原沢鎬太郎、柳瀬昌史、真井晃、黒崎弁之助の四氏が発起人だった。桐生町は人口三万二千人で、小学校は東西南北の四校がある。織物の一カ年の生産額が一千四百万円という。金木屋に泊まる。深更になって、雲間から月光が漏れているのを見た。これは実に旧九月十三夜の明月だった。客室の窓から一吟もなかったので一首漢詩を作った。当日は桐生の市日だった。

二十九日曇。人力車で四キロメートル余り行き、渡良瀬川を越えて広沢村に入った。会場は広沢小学校で、主催は青年会と同窓会、発起人は岡田清太郎村長、梅津喜九平小学校長などである。宿所は旧家藤生佐吉郎氏の邸宅⁽⁸¹⁾で、書画、骨董、植木、盆栽をとっても多く所蔵していた。また、庭園の泉石が大いに趣をかもし出していた。広沢村は半工半農で、農間に各戸が機械をしている。ここから一山越えると藪塚温泉に達する。その距離は四キロメートルほどといわれた。

三十日快晴⁽⁸²⁾。人力車で行くこと約二キロメートルで、太田市に戻った、蕪川村の蕪川小学校で講演した。この日は、教育勅語が発せられた記念日ということで、勅語奉読式があった。この時期、農家は稲刈りの時期にあたっていて繁忙なので、聴衆が少なかった。発起人は大淵真三郎、塩谷銈太郎、田島三郎、江森平吉、恩田栄三郎の五氏だった。当地にて、三十三年前磯部温泉で知り合った三吉亮作医師と邂逅した。講演後、道のり三キロメートルほど人力車を走らせ、太田町の芭蕉屋にまた泊まった。今夕は旧九月十五日で、明るい月が白く夜空

にかかっている。群馬県に入ってはじめての清澄な夜だった。

三十一日快晴。人力車で行くこと道のり約四・五キロメートル、その間の道路は、砥石のようだった。そして、休泊村の休泊小学校で講演した。青年会と報恩会が連合しての主催で、鹿山利忠村長、恩田栄三郎校長、鹿山彦一郎幹事長、柿間宥識報恩会長が尽力してくれた。休泊村は純農村で水田が多い。昔、大谷休泊が作り上げた用水を用いている。これを休泊堀と呼ぶ。村名は堀にちなむといわれた。夕方、円了は休泊村に泊らずに東京に帰ることに決め、太田駅発十八時四十九分の汽車に乗り込み、浅草駅に二十二時に着いた。月が白く輝いていることは昨夜と同じだった。

【註】

(1) 郷白巖編、一九一九年『東洋大学一覽』東洋大学同窓会、一四二頁参照。明治四十三年の千葉県巡講でも随行員を務めている。井上円了、井上円了記念学術センター編、一九九七年『井上円了選集第一三卷』東洋大学、一二三頁参照。

(2) 大塚久編、一九二五年『跡見女学校五十年史』跡見女学校、一七三頁参照。

(3) 群馬県立文書館所蔵資料では、大正十年から勢多郡長に移動している。清水禎文、二〇〇五年「明治期の群馬県における教育会の歴史的展開」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第五四集第一号、二七頁の表3中に名前が見られる。

(4) 以後の距離も、断り書きがない限り、十メートル単位を四捨五入したおおよその直線距離で表す。講演場所の場所も、各校の沿革を参考にしたが、記述の粗さから移転を把握できていない可能性がある。

(5) 第二回、第三回、第六回衆議院議員選挙で当選し、立憲自由党に所属していた。面識を得たのは、高橋九郎と所属政

党が同じことによると思われる。尾島町誌専門委員会編、一九九三年『尾島町誌通史編、下巻』尾島町、一五九頁参照。

(6) 一八五二年生まれで、初代・九代村長。『尾島町誌』一五四頁参照。

(7) 十三代町長。新田町誌編さん室編、一九八七年『新田町誌第2巻資料編(下)』新田町、二五一頁参照。

(8) 十五代村長。『新田町誌』二五三頁参照。

(9) 現在は、グレゴリオ暦の一月四日に行っており、その際は交通規制が敷かれる。

(10) 二代村長。『新田町誌』二五四頁参照。

(11) 「十八丁」の距離は、「一里」よりは短いという体感を表す大体の数字である。現在桜並木が間にないので、どの道を通ったのかは、分らない。

(12) 円了は、「客室六十余、浴客二、三百人をいえるべしという」と記しているが、現在は九室と表示されている。太田市ホームページ(<http://www.city.ota-gunma.jp/sangyou-kankou/kankou-tokusan/yabuduka.html>)参照。

(13) 「ホテルふせじま」のことで現在も隣にある。

(14) 距離から考えて太田市西長岡町の若宮八幡宮付近にあったと思われる。

(15) 現在のみどり市立笠懸小学校の前身の一つで、みどり市笠懸町鹿一五九八にあった。笠懸村誌編纂室編、一九八七年『笠懸村誌下巻』笠懸村、八〇二頁参照。

(16) 現在のみどり市立笠懸小学校の前身の一つで、みどり市笠懸町阿佐美一四五四にあった。笠懸村誌編纂室編、一九八七年『笠懸村誌下巻』笠懸村、八〇二頁参照。

(17) 五代校長。笠懸村は、集落間の対立のため、小学校が二つあった。『笠懸村誌下巻』八五一頁参照。

(18) 九代校長。『笠懸村誌下巻』八五〇頁参照。

(19) この距離は、直線距離のため、実際の二点間の対角線に近く、円了の「一里半」より短い。利根川を越えた「利根川橋」は、利根橋だと思いが確証はない。

(20) 九代校長。高崎市史編さん委員会編、一九六九年『高崎市史第一巻』高崎市、一七七頁。

(21) 和久田康雄、一九九三年『私鉄史ハンドブック』電気車研究会、五八頁参照。

(22) 翌大正七年一月に電化された。

(23) 五代町長。沼田町史編纂委員会編、一九五二年『沼田町史沼田を中心とする利根の研究』沼田町、九三六頁参照。

- (24) 小学校の校舎は川場村歴史民俗資料館として現存している。
- (25) 二〇一六年三月三十一日廃校。
- (26) 今の道のりでは、七〇キロメートルはある。
- (27) 当時、沼田中学校は沼田市西倉内町七四六にあった。
- (28) 米屋は続いているが、どちらも有名旅館だったけれども廃業している。
- (29) 桃野村誌編纂委員を務めた。桃野村編、一九七二年『明治四十三年刊桃野村誌復刻』月夜野町教育委員会、一頁参照。
- (30) 古馬牧村誌編纂委員会編、一九七二年『古馬牧村誌月夜野町誌・第二集』月夜野町誌編纂委員会、二二八頁参照。
- (31) 増田信太郎とあるが、増田誠三が正しい。『古馬牧村誌』二二九頁参照。
- (32) いずれも卒業はしていない。
- (33) 塩原太助翁記念公園公園（みなかみ町新巻）にある碑を指すと思われる。
- (34) 円了が記した「二里の間」から、八キロメートルの道のりだと考えると、後閑村長宅は、後閑駅付近であったと思われる。
- (35) 「三里半」とあるが、赤谷湖がある現道だと、一二・七キロメートルである。
- (36) 円了が法師温泉に宿泊したのは、明治十六年七月のことだが、どちらの宿かの記述はない。東洋大学井上円了記念学術センター編、一九九二年『井上円了センター年報』第一号、東洋大学、一二二頁参照。現在は、長寿館のみが営業している。
- (37) 「信光寺」とあるが、真光寺が正しい。
- (38) 井上円了、井上円了記念学術センター編、一九九七年『井上円了選集第一二巻』東洋大学、五九一頁の年月不詳な渋川講演を指す。
- (39) 円了は、「二十年前」と書いているが、『井上円了選集第一二巻』五八五頁によれば、二十五年前の明治二十五年四月上旬である。
- (40) 七代校長。室田町誌編集委員会編、一九六六年『室田町誌』室田町誌編集委員会、四七三、六八七頁参照。
- (41) 職と名前は『室田町史』四九四頁から補った。
- (42) 職と名前は『室田町史』四八六頁から補った。

- (43) 十二代校長。職と名前は『室田町史』四五六頁から補った。
- (44) 高崎市八島町のイノウエビルにあった。高崎市史編さん委員会編、二〇〇四年『新編高崎市史通史編四近代現代』高崎市、八八七頁参照。
- (45) 第三代四代市長。高崎市史編さん委員会編、一九七〇年『高崎市史第二卷』高崎市、七一頁参照。
- (46) 高崎市編、一九二七年『高崎市史下巻』高崎市、二一〇頁参照。
- (47) 『高崎市史下巻』二二二、二七七、二八七頁参照。
- (48) 『高崎市史下巻』二二五、二八六頁参照。
- (49) 『高崎市史下巻』二二七頁参照。
- (50) 『高崎市史下巻』二一九頁参照。
- (51) 円了は、『山端息軒』とするが、『山端息耕』が正しい。『高崎市史下巻』四五五頁参照。また、長松寺には、山端息耕の草稿や修養会の冊子が残っている。
- (52) 『高崎市史下巻』二四八頁参照。
- (53) 高崎市末広町二十三―一にあった。現在は高崎市文化会館、高崎少年科学館などになっている。また、『新編高崎市史通史編四』九一六頁には、『下田歌子・巖谷小波・井上円了・中村孝也など当代一流の講師を招いての講演会は、多感な年代の生徒に感銘を与えた』と円了のこの講演への言及がある。
- (54) 『高崎市史下巻』二三九頁、『高崎市史第一巻』二七五頁参照。
- (55) 円了は、『花敷山』とするが、同寺のホームページ (<http://www.takijigenji.or.jp/>) によると「華敷山」が正しい。群馬大学の前身。現在、前橋市日吉町一丁目のベイシア文化ホール（群馬県民会館）。
- (56) 当時の住所は、前橋市紅雲町で現在地とは異なる。
- (58) 十二代校長で、東京大学卒。前橋高校ホームページ (<http://www.maebashi-hs.gsn.ed.jp/kochorekikai/>) 参照。
- (59) 前橋市千代田町二丁目、前橋テルサが建っているところにあった。
- (60) 円了は、『開晴』としている。
- (61) 前橋文学館の揭示地図によると前橋市豎町にあった。
- (62) 「粕川から赤城山上まで三里、神社まで四里、山上には九十九谷ありという。」という赤城山との距離を記す文が、この日にあるが、この距離はおかしい。粕川から赤城神社までが約一〇キロメートル、そこから、山上の大沼までが

約一六キロメートルである。

(63) 九代村長。『南橘村誌編纂委員会編、一九五五年『南橘村誌』南橘村役場、六一頁参照。』

(64) 初代校長。『南橘村誌』一二二頁参照、略伝は二二五頁。

(65) 十二代校長。『南橘村誌』一一七頁参照、略伝は二一九頁。

(66) 北橘村誌編纂委員会編、一九七五年『北橘村誌』北橘村、九〇一頁参照。

(67) 桂昌寺十五世、總持寺副監院。『北橘村誌』九〇四頁参照。

(68) 十代村長。『北橘村誌』四三三頁参照。

(69) 七代校長。『北橘村誌』六六九頁参照。

(70) どちらかが三原田小学校長だが、校名は分からなかった。

(71) 住所は不明だが、数々の講演も行われており、大正五年十月十六日に同じところで、高島平三郎が講演している。

大間々町誌編さん室編、一九九六年『大間々町誌別巻三近代・現代資料編』大間々町誌刊行委員会、七七八頁、大

間々町誌編さん室編、二〇〇一年『大間々町誌通史編下』大間々町誌刊行委員会、五八二頁参照。

『大間々町誌通史編下』五八一頁参照。

(72) 七代町長。『大間々町誌通史編下』九八八、九九〇頁参照。

『大間々町誌通史編下』五五四頁参照。

(75) 『大間々町誌通史編下』三五九頁によれば、『大間々繁盛記』に旅館が出ているというが未管見である。二〇一六年

十二月に廃業したが、みどり市大間々町大間々にあった。

(76) 現在、みどり市大間々町桐原の同地は、大間々中学校になっている。

(77) 当時は桐生市仲町一丁目にあった。

(78) 絵葉書によると、桐生市本町にあった旅館である。

(79) 現在、桐生市役所がある桐生市織姫町一丁目一番地にあった。

(80) 『南船北馬集』の記述は東小学校。

(81) 桐生市広沢町 <http://www.kiryu-ci.or.jp/FT/2007hukei/07hujike.pdf> 参照。

(60) 参照。